

審査員特別賞の「不気味の谷」。私がもし編集者であったら、この作品を本として出版したい。そう思えるぐらい魅力のある近未来SF小説でした。

物語は、記憶を失った「私」が見知らぬ場所で目覚めるシーンから始まります。そこは欠陥のある人型機械が何体も捨てられている島でした。

作品タイトルの「不気味の谷」というのは、ロボットに対して人間が抱く感情の「ある部分」をあらわす言葉ですが、その語から私が真っ先に思い浮かべるのは、スティーヴン・スピルバーグ監督の映画『A. I.』（Artificial Intelligence 人工知能）です。そのため、つい『A. I.』と重ねながら読んでしまうところもありましたが、しかし読後、『A. I.』とはまた別の世界観を持つ、一本のおもしろい映画を楽しんだような満足感を覚えました。背景や機械たちが「映像」として目の前に迫り、それらが発する「音」も聞こえてきたのです。なかでも「音楽好きな機械」の使い方はじつにうまく、ラストシーンでも「音」が効果的に活かされていました。

ストーリー展開で都合のよすぎる箇所があったり、また、終盤、それまでの謎が一気に解かれる場面では説明が勝ってしまい少々単調な印象であったりと、気になるところも幾つかありましたが、しかし高校二年生でここまで書けるということに素直に驚きました。張った伏線をきちんと収束させる構成力。それぞれのシーンをくっきり浮かび上がらせる描写力。力のある作者だと思いますので、この先も書き続けてほしいです。

優秀賞の「星に届く日」は、中学一年生と小学生五年生の姉妹の物語。「姉は妹にとって常に前を歩く存在でなければならない」。そう考えている「姉」の視点で綴られています。

妹はいままでずっと姉のあとを追ってきましたが、あるとき、「姉が切り開いた道」から逸れて独自の道を進み始めます。そんな妹にいらだちを覚える姉。けれど妹が夢中になった対象である「星」を自分も見えていくうち、姉の胸のなかに変化が訪れます。

そういった姉の心理が、きめ細かに手にとるように描かれていますし、テーマもはっきりしていて、きれいにまとまった作品でした。ただ、そのきちんとしすぎているところが、作品にちょっと物足りなさを感じさせる原因のひとつにもなっているかなとは思いました。とはいえ、ラストシーンのあたたかさや美しさは心にのこり、読後感がとてもいい物語でした。

このほか、入賞には至らなかったものの、さくさくした文体で描かれた「雲の瞳」の雲の上の世界、「アップーカット」の人物たちのテンポのいい会話にも心ひかれました。

作者それぞれの思いのこもった作品を読み、みなさんはひとりひとりが輝く星であると、あらためて実感した今回でした。どうかこれからも、自身におおいに磨きをかけてください。